質疑応答

Ｑ１

本研究を始める前に、ハワイ側とコンタクトを持っていたか。

Ａ１

ハワイ大学とのコネクションは、まず資料としてフランク・ホーレー・コレクションから巻物を借りる話が数年前からあった。また、発表者自身もハワイ大学を出ているほか、自身の調査地もハワイであるため、コンタクトを取り続けてきた。

Ｑ２

アリゾナ記念館などの展示の歴史を追っていくだけでも、メタのレベルで、展示の歴史の表象のあり方の変遷ということが窺える。フィルムや貞子さんの鶴のことなどを含め、これらを観察する中で興味深かった事例を教えて欲しい。

Ａ２

発表者はアリゾナ記念館にはあまり特化しておらず、変遷については分からないが、ハワイの日系人の強制収容が歴史展示の中でどのように変遷してきたのかというものを博士論文の核としたいと考えている。フィルムについてはジェフ・ホワイトによる先行研究があるが、それらアリゾナ記念館の歴史表象変遷に関する先行研究を踏まえた上で発表者は、アリゾナ記念館自体、ハワイの方たちにある種バッシングされるような背景があると考える。もともとハワイアンの土地であったところをアメリカが記念館にしてしまったという点でコロニアリズムの象徴のように感じている人々もおり、もしかしたらハワイの方々の水準、つまり歴史認識を共有している部分に近づこうとしているのかもしれない。貞子さんの鶴に関しては、アリゾナ記念館の方からご遺族にコンタクトをとったと考えられるが詳細は分からない。

Ｑ３

ハワイの場合、博物館の経営母体はどこであり、それに州政府や連邦政府がどのくらい財政的、人的に関与しているのか。また、展示対象とされている先住民や日系人など、展示されている文化の担い手の人々は、どの程度博物館に関与しているのか、あるいはキュレーターとしてどの程度活躍しているのか。

Ａ３

ハワイではデータを取っていないが、アメリカの博物館では、収入（経営費）は３分の１が入館料、３分の１が助成金、３分の１が寄付と言われており、助成金はキュレーターが書く。それぞれの博物館の担い手としては、自分の文化、例えばハワイ先住民の文化に詳しい人やハワイ語やフラにも明るい人がなる傾向にある。展示を作るとき、コミッティーを作ってくるが、その際にご意見番として文化に詳しい人を相談役に含めて展示プロジェクトなどを作る。